

原 著

高齢者夫婦の死に対する意識と準備状況に関する研究

福武まゆみ*¹ 岡田初恵*¹ 太湯好子*²

要 約

本研究は、在宅で生活している高齢者夫婦の自身とその配偶者の死に対する意識および準備状況を明らかにすることを目的とした。

調査には70歳以上の在宅で生活している夫婦10組が参加した。調査内容は、(1)基本属性、(2)自分自身の死についての考え、(3)配偶者の死についての考え、(4)自分自身の死を想定しての準備についての考え、(5)配偶者の死を想定しての準備についての考えについて半構造化面接を実施した。分析には質的分析手法であるSCATを参考に、(1)データ中の注目すべき語句、(2)それを言いかえる為のデータ外の語句、(3)それを説明するための語句、(4)そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを付していき、(4)のテーマ構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論記述を行った。その理論記述を、サブカテゴリーとして位置づけ、高齢者夫婦の死に対する意識と準備状況をカテゴリー化し、それをもとにコアカテゴリーとして示した。

結果、対象者の平均年齢は77.9歳であった。健康状態は、90%の人が「よい」「まあよい」と回答していた。高齢者夫婦の死に対する意識は、『死の迎え方を考える』、『考えることの先延ばし』、『死を現実として捉える』の3つのコアカテゴリーを抽出できた。また、高齢者夫婦の死に対する準備状況は、『準備をすることの迷い』、『夫婦で整える死への準備』、『予測のできない配偶者の死と準備』の3つに整理できた。

1. 緒言

老年期は健康の喪失、人間関係の喪失など他の年代に比して喪失体験が多い。中でも配偶者の死別による喪失体験は、激しい悲しみや落胆・絶望などの情緒的な苦しみを伴う悲嘆の経験となる^{1,4)}。

パークス¹⁾は、配偶者を喪失したイギリス人男性の調査において、死別後6カ月以内の死亡率は同年代の既婚男性に比べ40%も高いと報告している。日本においても坂口²⁾は、高齢者の配偶者喪失により精神医学的障害の発生率は、死別後1年以内で75%、1年経過後でも46.9%であると述べ、配偶者の喪失が高齢者の心身に及ぼす影響の高さを指摘している。

本来、死別後の悲嘆は誰もが経験する出来事であり、正常な悲嘆反応は、悲しみや落胆等の苦しみから立ち直り適応していくプロセスである。しかし、悲嘆からの回復が遅れたり立ち直れない場合は、病

的悲嘆となる²⁾。

悲嘆からの回復に関連する研究において宮林³⁾らは、自然死より突然の死別が抑うつに強い反応を示していると報告している。従って、突然死においては、死に対する準備のないことが悲嘆反応を強めるのではないかとと思われる。また、奥⁴⁾の研究では、看病に満足を抱いている者は、死別後の早い時期に配偶者の死を寿命や運命と捉える傾向があると報告している。これらの結果から、生前からの死に対する心構えがある人は、正常な悲嘆反応に結び付きやすいことが推察される。

そこで、死への準備に関する研究を概観すると、高岡⁵⁾らが、死への準備教育の示唆を得るために、死の準備教育確立に向けての試みとして、過去10年間の死生観に関する文献検討を報告している。その中で、高齢者に対する死の準備教育を体系的に行っているという報告はなく、研究としても見当たらない

*1 川崎医療短期大学 看護科 *2 元岡山県立大学 保健福祉学部 看護学科
(連絡先) 福武まゆみ 〒701-0194 倉敷市松島316 川崎医療短期大学
E-Mail : fukutake.m@jc.kawasaki-m.ac.jp

かったとしている。また、研究対象者においても、高齢者自身がほとんどであり、配偶者を対象とした報告はなかった。さらに、デーケン⁶⁾は、悲嘆のプロセスを上手に乗り切ることができなかつた場合、心身の健康を損う危険性が非常に高く、悲嘆教育は予防医学の観点からも極めて重要であると述べている。このように、死への準備教育は、高齢者にとって重要な課題であるといえるが、高齢者の死への準備に関する研究は十分に検討されていない。

そこで、本研究では、夫婦ともに健在な高齢者の、死に対する意識と死に対する準備状況を明らかにし、死への準備教育の基礎資料を得ることを目的とした。

2. 研究方法

2.1 調査期間

平成23年3月～5月

2.2 対象者

A県、B県の、在宅で生活している70歳以上の夫婦10組で、寝たきり状態や認知症のない者とした。対象者の選定は、ネットワークサンプリングとし、民生委員や知人の紹介を受けた後、研究の趣旨を説明し、承諾を得られた者とした。

2.3 データ収集の方法

夫婦同席による語りの制限よりも、高齢者夫婦としての考えを明らかにすることと、双方の語りを促す効果を期待したため、夫婦同席のもと、研究への参加と会話の録音の了承を得た後、インタビューガイドに沿って、半構造化面接を行った。同席ではあったが、調査は夫婦それぞれに質問をし、インタビューに答えてもらった。

録音されたインタビュー内容は、文字に起こし、逐語録を作成した。面接時間は、夫婦それぞれに60分とし、1回のみとした。

2.4 調査内容

(1) 基本属性；年齢、性別、現在の健康状態、介護経験の有無、子どもの有無、仕事の有無、信仰の有無、親しい人を亡くした最近の経験の有無。

(2) 自分自身の死についてどのように考えているのか、いつ頃から考えているのか、考えるようになったきっかけは何か。(3) 配偶者の死についてどのように考えているのか、いつ頃から考えるようになったのか、考えるようになったきっかけは何か。(4) 自分自身の死を想定しての準備についての考え、どのような準備をしているのか、いつ頃から準備をしているのか。(5) 配偶者の死を想定しての準備についての考え、どのような準備をしているのか、いつ頃から準備をしているのかについて尋

ねた。

2.5 データの分析方法

小規模の質的データの分析に有効であり、明示的で定式的手続きを有する大谷⁷⁾によって提唱された4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて、(1) データ中の注目すべき語句、(2) それを言いかえる為のデータ外の語句、(3) それを説明するための語句、(4) そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを付していき、(4) のテーマ構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論記述を行った。その理論記述をサブカテゴリーとして位置づけ、意味内容の同質性と異質性を比較しながら類型化しカテゴリーを創設した。次に、カテゴリーをもとに、高齢者夫婦の死に対する意識と高齢者夫婦の死に対する準備状況についてコアカテゴリーにまとめた。

2.6 信頼性の確保

データの信頼性および信憑性は、偏った視点や先入観を可能な限り排除するために、質的研究に精通した、老年看護学を専門とする研究者間で、研究過程全般にわたって多角的に検討し、データから離れた解釈や分析にならないよう配慮した。

2.7 用語の定義

高齢者夫婦の死に対する意識；自分自身の死または、配偶者の死を想定して考えた時の、死に対する思いや認識とする。

高齢者夫婦の死に対する準備状況；自身の死または、配偶者の死に備えての準備に対する思いと死に備えての準備内容とする。

2.8 倫理的配慮

対象者には、研究者が記載した文書を用いて、研究の趣旨について詳細に説明し同意を得た後に実施した。また、同意後、同意を撤回できることや、データ収集中であっても拒否できること、対象者から得られた情報は、本研究以外には使用しないことを説明した。なお、本研究は岡山県立大学の倫理委員会（平成23年2月）において承認を得た。

3. 研究結果

3.1 対象者の属性（表1）

対象者は、10組の夫婦計20名であった。20名の平均年齢±SDは、77.9±4.0歳、夫の平均年齢は80.5±3.0歳、年齢の幅は75歳～85歳であった。妻の平均年齢は75.3±3.0歳であり、年齢の幅は71歳～81歳であった。全ての夫婦において夫の方が年上であり、年齢差は2歳～11歳であった。

健康状態は、「よい」が5名（25%）であり、そ

表1 対象者の属性

ID	年齢	子どもの有無	健康状態 (面)	現在の仕事	介護経験	信仰	親しい人を亡くした経験
A夫	81	有	3	無	無	無	有
A妻	77	有	3	無	有	有	有
B夫	82	有	3	無	無	無	有
B妻	77	有	3	有 (農業)	有	有	有
C夫	85	無	3	無	無	有	有
C妻	81	無	3	無	無	有	有
D夫	82	有	4	有 (農業)	有	有	有
D妻	75	有	3	無	有	有	有
E夫	75	有	4	有 (自営業)	無	有	有
E妻	73	有	4	有 (自営業)	無	有	無
F夫	82	無	3	無	無	無	有
F妻	71	無	3	無	無	無	有
G夫	80	有	3	無	無	有	無
G妻	75	有	2	無	有	有	無
H夫	83	有	2	無	無	無	有
H妻	78	有	3	無	無	無	有
I夫	77	有	4	有 (自営業)	無	無	有
I妻	72	有	3	無	有	無	無
J夫	78	有	3	有 (農業)	無	有	無
J妻	74	有	4	有 (農業)	有	有	無

注) 健康状態: 5とてもよい, 4よい, 3まあよい, 2あまりよくない, 1よくない

の内訳は、夫3名、妻2名で、「まあよい」が13名（65%）、90%の人が「よい」「まあよい」と回答していた。

介護経験については、有りと回答した人は7名（35%）で内訳は、夫1名、妻6名であり、妻の6割は介護の経験を持っていた。仕事の有無では、有りと回答した人は7名（35%）で、夫婦で内職や農業などをしていた。信仰の有無では、12名（60%）が信仰が有ると回答し、その内訳は夫5名、妻7名であった。最近親しい人を亡くした経験については、経験有りと回答した人は14名（70%）で、その内訳は、夫8名、妻6名であった。子どもは8組の夫婦が有りと回答した。

3.2 自身の死に対する意識 (表2)

聞きとり調査の中から得られた語りをもとに、ストーリー、理論記述に整理し、理論記述をサブカテゴリーと位置付け、そのサブカテゴリーをもとにカテゴリーとして整理した。その結果、自身の死に対する意識は、【死を迎える経緯を考える】【周囲に迷惑をかけずに死にたい】【死は遠い存在】【死を寿命と捉える】【生活の主導権に関連した死の順位】【自分の死後の配偶者への心配】【死を身近に感じると死を考える】【夫よりも長生きを望む(妻)】の8カテゴリーが抽出できた。

以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは

〈〉、ストーリーは（ ），具体的な語りは〈 〉で示した。

最も多くの人から抽出できたカテゴリーは、【死を迎える経緯を考える】であり、〈死を迎えるまでの経緯や死の状況を考える〉〈死に直面すると生を考える〉〈苦しまずに死にたい〉〈体力の衰えから不慮の事故を心配〉の4つのサブカテゴリーから構成された。

〈死を迎えるまでの経緯や死の状況を考える〉のサブカテゴリーでは、〈死というより、死ぬまでの病気のことが気になるよね、どうなって死ぬかということが心配だよ〉と死を迎えるまでの経緯や死の状況について考えていた。さらに、〈死よりも寝たきりになる不安の方が大きい〉と死に至るまでの経緯や状況を考えていた。

〈死に直面すると、生を考える〉では、〈ものすごい台風にあつてね、岸壁に船がたたきつけられて、沈没したことがあったんですよ。体が冷えてって寝たらそのままいっちゃうからね、先輩がほっぺをパチパチたたいてね。(中略)死を考えるというよりも無意識のうちに生きようと行動しているんですよ〉と死に直面した時に、死を考えるよりも生きることを考えると語っていた。

〈苦しまずに死にたい〉では、〈延命治療はせんでもええけど、苦しまんように命が切れる方法をし

表2 自身の死に対する意識

カテゴリー	夫	妻	理論記述 (サブカテゴリー)	ストーリー
1.死を迎える経緯を 考える	3	2	1.死を迎えるまでの経緯や死の状況を考える	死を迎えるまでの経緯や死の状況について考える (F夫)。死よりも病気などで、寝たきりになる方が心配である (H夫)。死の心配よりも寝たきりの方が心配である (H妻)。死よりも寝たきりになる不安の方が大きい (I妻)。死よりも寝たきりになる不安の方が大きい (J夫)。
	2	3	2.死に直面すると生を考える	他人の分まで長生きをする (C夫)。死に直面すると生を考える (C妻)。夫の助けがたいと生活できないので、1年1年を大事に生きている (F妻)。死の恐怖に直面すると生きることに必死である。死は恐れても仕方ない (G夫)。病気で死の覚悟をした時期もあったが、糖尿病と心臓病のコントロールをしながら、趣味をもって生きている。できるだけ生きることができたい (I妻)。
	1	0	3.苦しまずに死にたい	苦しまずに死にたい (D夫)。
	1	0	4.体力の衰えから、不慮の事故を心配	体力の衰えとともに、いつ不慮の事故をおこすかもしれないと考える (J夫)。
2.周囲に迷惑を かけずに死にたい	3	3	1.希望は突然死 (ピンピンコロリ) がよい	長い間苦しまずに突然死を希望 (A夫)。自分の理想の死は、ピンピンコロリである (B妻)。ピンピンコロリで亡くなりたいたい (H夫)。ピンピンコロリで亡くなりたいたい (H妻)。希望の死は突然死 (J夫)。長生きはしたくないが、元気でいれて、コトッと逝きたい (J妻)。
	0	2	2.死ぬまで望む健康	死ぬまでは健康でいたい (G妻)。寝たきりや病気にならないようにサブリを飲んで健康に気をつけている。(H妻)。
	1	1	3.他人に迷惑をかけたくない	自分の死よりも、自分が死ぬ時は夫に迷惑にならないようにしたい (A妻)。健康でいるための努力をしておき、迷惑のかからない (長患いをしない) 亡くなり方を希望 (G夫)。
3.死は遠い存在	1	1	1.死は、考えても仕方ない	死は考えても仕方ないので、深くは考えない。(B夫) 今を楽しく過ごしたいので、死は考えても仕方ない (C妻)。
	3	1	2.死は遠い存在であり、死は考えない	自分や配偶者の死は遠い存在である (D夫)。死は無縁な存在である (D妻)。普段は死については考えないようにして、悪い方へ考えないように努力している (F夫)。死については、状況によっては考えたり考えなかったりするもので、竹を割ったようには考えられない。現在、農業をしているので、いつも死を考えている訳ではない (J夫)。
	1	2	3.健康であれば、死は考えない	サブリを飲んで健康を大切にしているので、死については考えていない (H妻)。二人とも健康なら死について考えない (I夫)。健康に気をつけて生活をしており、元気なので死は考えない (J妻)。
4.死を寿命と捉える	2	1	1.老化とともに、死を考える	年をとれば死は考えるようになる。(B夫)。死ぬことについては、寿命と捉えている。老化を自覚すると死を考える。具体性をもたない自分の死 (E妻)。74・5歳の頃から、体調の変化とともに死を考えるようになった (J夫)。
	3	2	2.生まれた以上、死は運命であり寿命である	死ぬ時期は誰にもわからない (E夫)。死ぬことについては、寿命と捉えている (E妻)。生まれた以上は死ぬ運命なので、来るべき時が来たら受け入れないといけない (F妻)。死は、一度は必ず来るので、自然の成り行きにまかせる (G夫)。死ぬ時は運命に任せる以外にない (H夫)。
5.生活の主導権に 関連した死の順位	2	1	1.生活の主導権を握る者が後から亡くなる方がよい	みじめな生活になったら困るので、1日でも妻には長生きしてほしい (C夫)。自分は病気で夫に頼っているの、夫に長生きしてもらいたい (F妻) 今まで自分がやっていたので、自分がいなくなると妻が困る。そのため、妻の方が先に亡くなる方がよい (G夫)。
	1	0	2.配偶者が病気であれば、自分の方が長生きをする必要がある	妻が病気なので、妻のことが心配でできるだけ生きたい (I夫)。
6.自分の死後の 配偶者への心配	1	0	1.自分の死後の妻への気がかり	自分の死後について妻にはもっと真剣に考えてほしい。自分の死後は、妻に精神的に強くてほしい。自分が亡くなると年金が減るので生活しにくくなる (H夫)。
	0	1	2.自分の死後の夫の生活が心配	食べることでか困ると思う (D妻)。
7.死を身近に感じると死を考える	1	0	1.死と隣り合わせの体験は死を考える	死を身近に感じると死を考える。死と隣り合わせの体験をすることで死を考える (F夫)。
	0	1	2.他人の死から自分の死を考える	他人の死に出会うと自分の死を考える (B妻)。
8.夫よりも長生きを望む (妻)	0	2	1.夫を見送ってから自分が死ぬことを望む	自分は夫よりも長生きして夫を見送りたい (B妻) 年齢的なこともあるが、夫を送ってから自分が亡くなる方がいい。(G妻)

注1) () は抽出された対象者を示す

注2) 夫・妻の欄の数字は、ストーリーが抽出された人数を示す

てくれりゃあええと思うけどな」と、苦しまずに死にたいと語っていた。

〈体力の衰えから不慮の事故を心配〉は、〈死は考えないですなー、せやけど、いつなー、ふいに事故とかなんとかということばまんざら考えんこともないですがな〉と、死よりも事故を起こす不安を語っていた。他のカテゴリーについての詳細は表2に示した。

3.3 配偶者の死に対する意識 (表3)

配偶者の死を想定しての配偶者の死に対する意識

では、【配偶者の死は想定できない】【配偶者の死後の生活の心配】【配偶者の死を考える】【看取ってから死にたい (妻)】の4カテゴリーが抽出された。

サブカテゴリー数の最も多かったカテゴリーは、【配偶者の死は想定できない】であり、85%の高齢者から抽出された。サブカテゴリーとしては、〈配偶者の死は考えられない〉〈配偶者の死は考えない〉〈若い方が長生きする〉〈妻の長生きを期待〉〈病気を持たない配偶者の方が長生きをする〉の

表3 配偶者の死に対する意識

カテゴリー	夫	妻	理論記述 (サブカテゴリー)	ストーリー
1.配偶者の死は想定できない	3	4	1.配偶者の死は考えられない	夫婦なので、自分の死後の妻のことを考えるが、妻の死については考えられない(B夫)。夫の死はショックが大きく、年をとると立ち直る元気がなくなるので、夫の死は考えたくない(B妻)1人残されるとみじめなので、妻に長生きしてもらわないと困るので、妻の死は考えられない(C夫)。夫の死は考えたくない(C妻)。夫の死は真剣に考えられない(D妻)。妻に頼っているため、妻の死は考えられないし、想像できない(F夫)。自分が病気を持っているので、夫が亡くなると思うとぞっとする。夫には長生きしてほしいと思っており、夫の死は想像できない(F妻)。
		3	2.配偶者の死は考えない	取り越し苦労しても仕方ない、先のことを考えても意味がないので、妻の死については考えない(E夫)。百姓をするくらい元気であり、死を考えると人生面白くないので、夫の死は考えない(E妻)。妻の死を考える出来事に遭遇していないので、妻の死は考えない(H夫)。元気なので夫の死は考えない。持病はあるが、サプリも飲んでるし、寝ついていないので死は考えない(H妻)。検査結果が良好だったこととコントロールができているので、死は考えない(J妻)。
	2	1	3.若い方が長生きする	妻は自分より若いので、妻の死は考えられない。年齢から考えて自分の方が先に死ぬと決めている。妻が先に死ぬことは想定外である。(D夫)年の順だと自分先になくならないと思っているので、妻の死は考えていない。(G夫)年齢では、夫の方が先に亡くなる(G妻)。
	1	0	4.妻の長生きを期待	妻を心のよりどころにしているため、妻には自分より長生きをしてもらいたい(I夫)。
	0	2	5.病気を持たない配偶者の方が長生きをする	自分は病気をしたので、夫の方が長生きをする(C妻)。夫の方が元気なので長生きをする(I妻)。
2.配偶者の死後の生活の心配	2	3	1.配偶者の死後の自分の生活が心配	妻が先に亡くなると食生活に困る(C夫)。夫が亡くなると何もできないので困る(F妻)。妻が先に亡くなると、今まで家事はしていないので困る(J夫)。夫を頼りにしているので、夫の死後の田畑の管理が心配(E妻)。日頃の生活で夫の力を頼りにしているので、いなくなると困る(J妻)。
		3	0	2.妻の死後の自分の生活は心配ない
	1	0	3.妻の死後の病気が心配	1人残されて、認知症になったら迷惑をかけるので困る(F夫)。
3.配偶者の死を考える	1	0	1.持病を持つ妻の死は考える	妻も持病を持っているので漠然とは死は考える(J夫)。
		0	1	2.身内の死をきっかけに夫の死を考える
	0	1	3.老いとともに夫の死を考える	自分の老いとともに夫の老いをここ1年、日々の生活の中で感じ始めており、老いとともに死を身近に感じている(B妻)。
4.看取ってから死にたい(妻)	0	1	4.夫より先に亡くなる申し訳なさ	夫より先に逝くのは申し訳ない(F妻)。
		0	1	5.夫の見送りをすることが妻の務め

注1) () は抽出された対象者を示す
 注2) 夫・妻の欄の数字は、ストーリーが抽出された人数を示す

5サブカテゴリーで構成されていた。以下、サブカテゴリーの詳細をストーリーと語りの内容から述べる。

〈配偶者の死は考えられない〉では、〈考えませんな、考えると先はまっくらじゃ。一日でも楽しく、往生安楽が一番です〉と(1人残されるとみじめなので、妻に長生きしてもらわないと困るので、妻の死は考えられない)という思いを語っていた。妻に関しても、〈自分が寝ていて本当に苦しい時があるんですよ。このまま朝まで大丈夫かなって思うこともあるんですよ。主人が側にいてくれるから心強いですけど、主人が亡くなると思うとぞっとしますね。主人がいなくなったら、想像できないですね。それくらい大変なことだと思います〉と夫の死は考えられないと語っていた。

〈配偶者の死は考えない〉では、〈そういう場面がないから、思わんわな〉と(妻の死を考える出来事に遭遇していないので、妻の死は考えない)という思いを語っていた。妻に関しても、〈じゃからお父さんが死んでしまうということは今の所考えてお

らんです。お父さんは頭の先から足の先まで国立で1月に検査をしてもろうたんです〉と(検査結果が良好だったこととコントロールができているので、死は考えない)という思いを語っていた。

〈若い方が長生きする〉では、〈きまっとるわけではないけど、歳の順から行けばね自分の方が先だ〉と(年の順だと自分先になくならないと思っているので、妻の死は考えていない)という思いを語っていた。

〈妻の長生きを期待〉では、〈話し相手がおらんと、よう生きておらんよ僕は。家内が死んだらな。もう死んでもええわと思うようになると思う〉と(妻の長生きを期待し、妻を心のよりどころにしている)という思いを語っていた。

〈病気を持たない配偶者の方が長生きをする〉では、〈平成13年に、私が大病を患って手術をしました。夫は私より元気だから、私より長生きするのではないかと思っております〉と(自分は病気をしたので、夫の方が長生きをする)という思いを語っていた。他のカテゴリーについての詳細は、表3に示

した。

3.4 夫婦としての死に対する準備状況(表4)

夫婦としての自身の死と配偶者の死に対する準備状況については、夫婦に共通する部分が多かったことから、まとめて高齢者夫婦としての死に対する準備状況として示した。結果、【準備の必要性は感じていない】【死ぬまでの金銭面の準備】【早くからの準備は不吉】【他人に依存したい準備(夫)】【弔いに必要な準備】【感じる死への準備の必要性】【遺言の準備】【夫が困らないような生活力の準備(妻)】【手本となる身近な者の死への準備(妻)】【予測のつかない配偶者の死に対する準備】の10カテゴリーが抽出された。サブカテゴリー数の最も多かったカテゴリーを例に述べる。

【準備の必要性は感じていない】のカテゴリーでは、〈準備の必要性を感じていない〉〈何も準備はしていない〉〈準備をしなくてもなんとかなる〉〈自分の方が早く亡くなる〉の4サブカテゴリーで構成されていた。

サブカテゴリーの〈準備の必要性を感じていない〉では、〈われわれは、考える準備をするものもないわーのー〉と準備の必要性を感じていない思いを語っていた。

〈何も準備はしていない〉では、〈みんな他の人はお墓を作っておられるけどな、そねなことは、全然、まだ、なんとも思っていない〉と死への準備はしていないと語っていた。

〈準備をしなくてもなんとかなる〉では、〈その日、その時を生きているので、準備はしていない。二人ともその時その時を頑張ればいよいよというのがあります〉と今を頑張っているので準備をしなくてもなんとかなる思いを語っていた。

〈自分の方が早く亡くなる〉では、〈準備は別にないわな。だいたい、僕の方が早く死ぬと思えますけー〉と年上の方が先に亡くなるので準備は必要ないという思いを語っていた。他のカテゴリーについての詳細は表4に示した。

3.5 コアカテゴリーから見た高齢者夫婦の死に対する意識(表5)

次に、「自身の死に対する意識」と「配偶者の死に対する意識」の12カテゴリーをもとに、高齢者夫婦の死に対する意識をコアカテゴリーとして整理した。以下コアカテゴリーを『』で示した。

結果、『死の迎え方を考える』『考えることの先延ばし』『死を現実として捉える』の3つのコアカテゴリーを抽出することができた。(表5)

『死の迎え方を考える』のコアカテゴリーに該当したカテゴリーは、【死を迎える経緯を考える】

【周囲に迷惑をかけずに死にたい】であり、死そのものより、どのように死を迎え、周囲に迷惑をけないで最後を迎えることができるかと、自分の生き方そのものへの問いかけから構成されていた。

『考えることの先延ばし』のコアカテゴリーは、【死は遠い存在】【配偶者の死は想定できない】から構成され、自分の死を考えたくないし、配偶者の死はさらに考えることすらしたくないと考えていた。

『死を現実として捉える』のコアカテゴリーでは、【死を寿命と捉える】【自分の死後の配偶者への心配】【生活の主導権に関連した死の順位】【死を身近に感じると死を考える】【夫よりも長生きを望む(妻)】【配偶者の死後の生活の心配】【配偶者の死を考える】【看取ってから死にたい(妻)】であり、死を現実視して捉えていた。

3.6 コアカテゴリーから見た高齢者夫婦の死に対する準備状況(表6)

表4に示した「夫婦としての死に対する準備状況」の10カテゴリーを整理した結果、『準備をすることの迷い』『夫婦で整える死への準備』『予測のできない配偶者の死と準備』の3つのコアカテゴリーに整理できた。

『準備をすることの迷い』は、【準備の必要性は感じていない】【早くからの準備は不吉】【他人に依存したい準備(夫)】であり、準備の必要性を感じていない思いや、準備をしたくないという思いから構成されていた。

『夫婦で整える死への準備』は、【死ぬまでの金銭面の準備】【弔いに必要な準備】【感じる死への準備の必要性】【遺言の準備】【夫が困らないような生活力の準備(妻)】【手本となる身近な者の死への準備(妻)】であり、生活資金や遺言、弔いなどの物理的な準備と自分の配偶者への配慮に関する内容から構成されていた。

『予測のできない配偶者の死と準備』は、【予測のつかない配偶者の死に対する準備】のカテゴリーの一つのみから構成され、配偶者の死への準備は、予測がつかないだけに何を準備すればよいかわからない状況を述べていた。

4. 考察

4.1 高齢者夫婦の死に対する意識

高齢者は、自身の死を、【死は遠い存在】と捉えていた。山本⁸⁾は、「死に対する意識的および無意識的嫌悪感がきわめて強い。他者の死はしばしば話題にのぼらせるが、自己の死については極度の拒絶反応がある。老人にとって主観的な死は禁忌であ

表4 夫婦としての死に対する準備状況

カテゴリー	夫	妻	理論記述 (サブカテゴリー)	ストーリー
1.準備の必要性は感じていない	3	0	1.準備の必要性を感じていない	元氣なので準備の必要性も感じておらず、準備もしていない(F夫)。妻が亡くなってもどうにかなる。何も準備はしていない(J夫)。準備をするものもない(H夫)。
	1	2	2.何も準備はしていない	特に準備は何もしていない(A妻)。他の人の準備状況を聞いても、準備はしていない。日々が過ぎたらそれでよい(D夫・E妻)
	1	1	3.準備をしなくてもなんとかなる	準備はしなくてもなんとかなる(F夫)。その時その時を生きているので準備はしていない(G妻)。
	1	0	4.自分の方が早く亡くなる	自分は年上で、健康状態は妻の方がよいので、自分の方が先に亡くなるので準備は必要ない(J夫)。
2.死ぬまでの金銭面の準備	3	2	1.金銭面での準備はしている	迷惑をかけないように、葬儀代の準備と亡くなるまでにかかるお金の準備はしている。お金の準備以外はしていない(B夫)。亡くなるまで、夫婦二人で生活できればそれでよいと考えており、生活費としての金銭面の準備はしている(C妻)。死ぬまでの金銭的な準備をしないといけない(E妻)。できるだけ身内に迷惑をかけたくない。死ぬまでの間に体が不自由になったら、公の施設に入りたいので、金銭面の準備が必要である(G夫)。心の準備と金銭面の準備として、いつ感と宣告されても動揺はしないし、保険をかけており、迷惑をかけないだけの準備はしている(I夫)。お金さえあればなんとかなるので、特に準備の必要性はない(G夫)。準備は何もしていない。お金さえあれば何でもできるので、保険に入っている(I妻)。金銭面の準備はしているし、それ以外の準備は考えない(J妻)。準備としては、娘に迷惑をかけたくないので、お金の準備はしているが、それ以外はしていない(J妻)。世のお金があれば生活できる(J夫)。
	2	3	2.お金があれば、準備は必要ない	知り合いとの会話の中で準備の必要性は実感しているが、準備をするにはまだ早い。自分はまだ準備をしないといけない年齢ではない(E妻)。まだ77歳で若いし、元氣なので準備をするには早いので、遺産相続の遺言の準備はしていない(I夫)。母親はいる準備をしていたが、自分はまだ準備をしないといけないという気持ちに出来ない(I妻)。
3.早くからの準備は不吉	1	2	1.まだ、死の準備をする年齢ではない	深く考えないようにして、早く準備はしないことにしている(F夫)。
	1	0	2.早くから準備はしないことにしている	早くから準備をすると、周囲から自分の死を予期していたと思われるので、早くから準備をしないほうがよい(A妻)。死は考えていないので準備はない(B妻)お墓の準備は早くからしないでよい(E妻)。
	0	3	3.早くから準備したくない	自分がしなくても死んだ後のことは誰かがしてくれる(D夫)。準備は何もしていないし、自分の死後は、スムーズに葬儀をしてくれればそれでよい(J夫)。
4.他人に依存したい準備(夫)	2	0	1.自分が準備をしなくても、残された者が弔いをする	親の死に関しては子供が準備をするという昔からの風習があるので、自分達が準備をしなくてもよい(E夫)。
	1	0	2.親の死は子供が弔いをする	妻に任せておけば何でもしてもらえると安心感から、自分では何も準備をしなくてもよい(E夫)。
	1	0	3.妻に準備を任せている	妻の死後は、夫の面倒は、娘がみてくれることが約束されているので、配偶者の準備は何もしていない(A夫)。
	1	0	4.子供が面倒をみてくれるので、準備は不要	自分が何かをするというよりは、兄弟が弔いをしてくれればよい(G夫)。
	1	0	5.兄弟が弔いをしれければよい	準備としてというよりも、付き合いで葬儀屋に積み立てをしている(G妻)。付き合いで、葬儀屋に積み立てをしている(G夫)。死への準備として付き合いではあるが、葬儀代は積み立てをしている。葬儀代の準備ができるまでは死ねない(H妻)。母が言っていたように、積金をよくしても、中身が整っていないと駄目なので、花器の準備が必要である。若い頃は子供を育てたり、家を建てることで精一杯でできなかったが、子供が巣立つと死ぬ準備をしないといけないと母親が言っていたので、自分達も葬儀の準備をしないといけない(J妻)。
5.弔いに必要な準備	1	3	1.葬儀の準備	準備として墓地は用意している(G夫)。お墓の準備はできている(I夫)。
	2	0	2.墓地の準備	準備の必要性は感じていて、戒名を夫婦分用意(B妻)。
	0	1	3.戒名の準備	準備として墓地は用意している(G夫)。お墓の準備はできている(I夫)。
	0	1	4.弔いは子供に迷惑をかけない	子供に迷惑をかけないように準備をしないといけない(B妻)。
6.感じる死への準備の必要性	1	3	1.準備の必要性は感じるができていない	友人の死を聞いて準備の必要性を感じたが準備はできていない(B妻)。準備の必要性は感じているが何も準備はしていない(D妻)。準備をしておきたいという思いを持っており、夫と話し合っしておきたいことを持っているが、夫が言ってくれないので準備が進まない状況である(F妻)。遺産相続の遺言をする必要性は感じていない(I夫)。
	1	2	2.希望を伝えておく必要性	準備の一つとして、自分の希望を伝えておく必要性を感じている。(E妻)。準備の一つには、子供に伝えておきたいことを話し合いたい(F妻)。自分の死後、妻が困らないように、普段から妻には大事なことは伝えていたので、子供が帰ってきたら子供に伝えないといけない(H夫)。
	1	0	3.身辺整理の必要性は感じているができていない	夫婦共に不要な物を処分し、身辺整理をする必要性を感じているが、整理はできていない(A夫)。
7.遺言の準備	1	2	1.遺言の準備	遺言を書いて準備。先のことを心配しても思うようになるわけではないので、遺言以外の準備の必要性は感じていない。(C夫)遺言状を書く以外の準備はしていない。(C妻)箱の中に入れてもらいたい項目を記しておく必要がある(E妻)
	0	1	2.自分の希望を箇条書きにして残す	日々の時間を大切にするとともに、「夫に何かあったらどうしよう」という思いからも準備の必要性を感じている。死への準備として、自分の希望を箇条書きにして残している。(B妻)
8.夫が困らないような生活力の準備(妻)	0	3	1.夫が困らないような生活力をつける働きかけ	自分の死後困らないように夫に家事を手伝ってもらっている(B妻)。死の準備は妻がリードしていくものと思っているので、自分が亡くなっても困らないように、自分のことは自分でやってもらっている(G妻)。近所の人も言っていたが、自分が亡くなった後、一人で生活できるようにしておく必要がある(I妻)。
9.手本となる身近な者の死への準備(妻)	0	3	1.身近にお手本があると準備の必要性を考える	準備内容に関しては、母親を送った時に準備したことを重ね合わせて準備を考えている(E妻)。祖母が早くから旅支度を整えていたので、自分達も準備の必要性を感じているが、夫の旅支度はできていない。自分が準備をすることで、子供にも自分の姿を見せたい(B妻)。身内の人を送っているからどうしたらいいかはわかる(G妻)。
10.予測のつかない配偶者の死に対する準備	9	8	1.配偶者の死の準備は見当がつかない	特には何もしていない(A夫妻、B夫、C夫、F夫妻、G夫妻、H夫妻、J夫妻)。自分のはしているけど、夫のはしていない(B妻)。準備はしていないし、考えたこともない。(E夫)。配偶者の死に関する準備は見当がつかない。(E妻)。何を準備したらよいかかわれば準備をすると思うが、わからないので準備はしていない。(I妻)。配偶者の死に対する準備は、何をすればよいかかわからない。(I夫)。

注1) ()は抽出された対象者を示す

注2) 夫・妻の欄の数字は、ストーリーが抽出された人数を示す

表5 コアカテゴリーからみた高齢者夫婦の死に対する意識

コアカテゴリー	カテゴリー
1.死の迎え方を考える	1.死を迎える経緯を考える
	2.周囲に迷惑をかけずに死にたい
2.考えることの先延ばし	1.死は遠い存在
	2.配偶者の死は想定できない ※
3.死を現実として捉える	1.死を寿命と捉える
	2.自分の死後の配偶者への心配
	3.生活の主導権に関連した死の順位
	4.死を身近に感じると死を考える
	5.夫よりも長生きを望む(妻)
	6.配偶者の死後の生活の心配 ※
	7.配偶者の死を考える ※
	8.看取ってから死にたい(妻) ※

注1) ※は配偶者の死に対する意識のカテゴリーを示す

表6 コアカテゴリーから見た高齢者夫婦の死に対する準備状況

コアカテゴリー	カテゴリー
1.準備をすることの迷い	1.準備の必要性は感じていない
	2.早くからの準備は不吉
	3.他人に依存したい準備(夫)
2.夫婦で整える死への準備	1.死ぬまでの金銭面の準備
	2.弔いに必要な準備
	3.感じる死への準備の必要性
	4.遺言の準備
	5.夫が困らないような生活力の準備(妻)
	6.手本となる身近な者の死への準備(妻)
3.予測のできない配偶者の死と準備	1.予測のつかない配偶者の死に対する準備

る。」と報告している。本研究においても、高齢者は、身体の衰えとともに死が近いことを意識するがゆえに、死を考えないようにしていた。また、重兼⁹⁾が「宗教を持たない日本人は、死の問題を直視しようと思わず、先へ先へと押しやりながら、なにかにまぎらわして死の不安から逃げようとした。」と述べているように、本研究においても、死の問題を直視しないように、死を意識化しないようにし、死を考えることの先延ばしをしていることが推察できた。

このことは、配偶者の死においても同様であり、ほとんどの夫婦が【配偶者の死は想定できない】と考えていた。サンダース¹⁰⁾は、著書の中で「配偶者の死に対して準備ができていない人はまれです。避けたいこの苦しみに対する唯一の防御策はそれを直視しない、拒否することだけだと思っているかのようです。」と述べており、本研究の結果においても、夫婦は死の話題を直視せず、避けているような印象であった。特に夫の場合は、妻よりも年長であることから、自分が先に亡くなるのは当たり前のような思いを持ち、妻が先に亡くなることは想定外の出来事のように捉えていた。

一方で、【死を寿命と捉える】【死を身近に感じると死を考える】ようであり、配偶者が持病をもつ

ていたり、身内の死をきっかけに配偶者の死を現実的に捉え【配偶者の死を考える】から『死を現実として捉える』を抱く。そして、「年とりゃ、死ぬことを考えるようになるわねー」と、加齢に伴う身体的衰えから死を意識し、高齢者に特徴的な死の現実感を持っていた。

また、残された配偶者もしくは自身の生活のことを考え、夫は自分の死後の妻の経済的な心配をし、妻は自分の死後の夫の生活について【自分の死後の配偶者の心配】と語っている。一方【配偶者の死後の生活の心配】として、配偶者の死後の自らの生活上の心配を語っている。これらは、日常生活上で担っている役割から発生する心配であると推察できる。先にも引用したサンダース¹⁰⁾は、「頼みとしていた配偶者はもういない。自分がこれまでにやってきた仕事に加えて、亡くなった配偶者がやっていた仕事もやらなくてはならない。(中略)こんな状況で悲しみによるストレスに対処するのは不可能のように思われます。」と述べているように、夫婦どちらかが亡くなるということは、今まで分担していた役割を配偶者の分も行うこととなり、悲しみの中で、かなりの負担となることが推察できる。このことは、妻を頼りにしている夫は、自分が先に亡くなることを望み【生活の主導権に関連した死の順位】

が重大となる。このことは、妻の場合も同様であるといえる。

さらに、妻は、複雑な思いを感じていた。《自分が寝てて本当に苦しい時があるんですよね。（中略）主人が亡くなると思うとぞっとしますね。》と【生活の主導権に関連した死の順位】や【配偶者の死後の生活の心配】をし、夫に先立たれると困る思いをもつ一方で《主人をおいて私が逝く言うのは、申し訳ないです》と【夫を看取ってから死にたい】【夫よりも長生きを望む】と自分の方が夫よりも長生きをしたいというアンビバレンスな思いを持っていた。

また、【配偶者の死後の生活の心配】をしない高齢者もみられた。【配偶者の死後の生活の心配】をしない高齢者は、全て夫であり、現在の生活を妻に頼らず生活をしている男性であった。そして、自分の死後の配偶者への気づかいの言葉を語っていた。このことは、夫婦ともにみられ、性差というより、夫婦のおかれている立場に起因する思いであると推測された。

また、『死の迎え方を考える』では、【死よりも死を迎える経緯を考える】【周囲に迷惑をかけずに死にたい】と亡くなるまでは健康でいたい思いや亡くなる時は他人に迷惑をかけないで亡くなりたいと、亡くなるまでの自分の生き方を考えていることが推察できた。このことは、木内¹¹⁾らの、高齢者の希望する終末期は、「迷惑かけずに」「長期療養せず」「ピンピンコロリ」「ぼっくりと」といった記述が非常に多いとする報告と類似する内容であった。言い換えるならば、高齢者の死に対する意識としては、死ぬまでどう生きていくかであり、できれば、死を考えることは先延ばししたいと考えている。一方、避けられない死の現実感も感じているということが明らかになった。

4.2 高齢者夫婦の死に対する準備状況

次に、高齢者夫婦の死に対する準備状況について抽出されたコアカテゴリーからみると、高齢者夫婦は、『準備をすることの迷い』を持つ一方で、死の準備の必要性を感じていることが明らかになった。具体的に示すならば、準備していることは金銭面、弔い、遺言、自身の死後の配偶者の生活上の自立に関することであった。波平¹²⁾の指摘にあるように、自らの死について考えたり語ったりすることはタブー視するような、そのような死の文化の影響から、死をタブー視することにより、心の中で死を自分のこととして捉えることを避けていることが準備状況に影響し、早くから準備をしないとする意識に繋がっていると推察された。また、死の準備をする

ことで、自分に死期が近づいてくるような意識が生じることが推察され、そのことが準備状況へ影響しているものと考えられた。

さらに、『準備をすることの迷い』の中で、《昔から、田舎では親のお墓は息子がする、ようせんものは、親不孝をしとるんじゃ。》の語りから分かるように、その土地の風習の影響や自身の家の習慣からくる経験がもたらす影響もあると考えた。

次に、配偶者の死への影響として、竹中¹³⁾は、老年期になっての配偶者の死は、悲哀という精神的な面だけでなく、生活を直撃する。65歳以上の高齢者夫婦世帯が増加しているが、配偶者が亡くなった後の1人暮らしに耐えられる人は少ないと述べている。本研究においても、10組中9組が夫婦二人暮らしであり、配偶者が亡くなると1人暮らしとなり、生活を直撃することが推察できる。しかし、高齢者は、『準備をすることの迷い』を感じ、『考えることへの先延ばし』をしていた。

さらに、配偶者の死に対する準備では、『予測のできない配偶者の死と準備』というコアカテゴリーからも、配偶者の死への準備については、イメージ化できていないことがうかがえる。

4.3 高齢者の死に対する準備教育の意味

老年期における死に対する準備教育として、山本⁸⁾は、老年期は死に直面する時期で、もっとも切実に死に対する準備教育を必要とする期間である。もはや猶予はできない。しかし、老年期は、この教育のためには、最も困難な時期でもあると述べている。さらに、老年期教育の問題点として、過去の出来事には、より関心があり、それが話題に上る時には、活気を取り戻すこともあるが、新しい問題、将来の問題には関心が薄い。このような人たちは、教育に必要な前提条件を欠くものと言わざるを得ないと高齢者に対する準備教育がいかに難しいかを述べている。本研究においても、『考えることへの先延ばし』や『準備をすることの迷い』というコアカテゴリーが抽出できた一方で、『死を現実として捉える』を抱き、『夫婦としての死への準備』を考えていることがコアカテゴリーにおいて示された。近藤¹⁴⁾は「死についての命題」として、「人間は死なねばならない存在であることを知っているが、死とは何かを知らない存在である」「人間は死なねばならないことを知っているが、いつ、どのように死ぬかは知らない存在である」と述べている。また、「人間は死なねばならない存在であることを知っているにもかかわらず、死それ自体が何であるかを知らず、また、いつ、どのように死ぬのかを知らないゆえに、不安を抱く存在である」とも述べている。

そして死への不安を抱くのは、その不安の根底に生への希求、生への執着が存在するからだ指摘している。一般的現象として人間は死への不安ゆえに、死なない存在であるかのように生きている。本研究の結果においても、死に至る過程、つまり『死の迎え方を考える』が死に対する意識のコアカテゴリーの中で抽出できた。つまり、自分の在り方と深く関わるのが死の準備ともいえよう。【早くからの準備は不吉】と考え、タブー視されていた死のイメージを取り除き、「死」への関心を高める文化を作りあげる。そして、人間が死んでいく時、その人が自分の人生に意味を見出すことが何にもまして大切なことであり、喜びに違いない。高齢者夫婦は、共に生きた時間だけお互いの結びつきを深めている。それゆえに、配偶者の死は、悲しみや落胆、絶望などの情緒的な苦しみを伴う悲嘆の経験となりやすい。

デーケン¹⁵⁾は、死への準備教育の目的が「自己と他者の死に備えての心構えを修得すること」と述べているが、夫婦がそろって元気うちにそれぞれの死に向き合い、自己と他者の死に備えての心構え

を修得する。この為の準備教育こそ大切であると考ええる。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究では、10組の夫婦における限られたデータでの分析であるが、最後2組は他8組と同じような内容の語りであったため、飽和に近付いたと考え終了とした。さらに数例の調査を追加して確認し新たなカテゴリーの抽出がないか確認をすることが望ましいと考えるが、死について語ることへの協力が得られにくく、研究の限界であると考ええる。

今回の研究において、配偶者の死に対する準備については明らかにならなかった。今後、配偶者を喪失した高齢者を含めて調査し、配偶者の死に対する準備内容について明らかにしていく必要がある。また、今回死に対する意識と準備状況から死に対する準備意識を導き出すことができなかったが、今後準備意識を明らかにすることは準備教育につながると思われる。

文 献

- 1) パークスCM：死別. 桑原治雄, 三野善央訳, 第2版, メディカ出版, 大阪, 28, 2002.
- 2) 坂口幸弘, 柏木哲夫, 恒藤暁：老年期における配偶者との死別後の精神的健康と家族環境. 老年精神医学雑誌, 10, 1055-1062, 1999.
- 3) 宮林幸江, 安田仁：死因の相違が遺族の健康・抑うつ・悲嘆反応に及ぼす影響. 日本公衆衛生雑誌, 55, 139-146, 2008.
- 4) 奥祥子：看病の程度が高齢者の配偶者死別後の心理変化に及ぼす影響. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 11, 69-74, 2000.
- 5) 高岡哲子, 紺谷英司, 深澤圭子：高齢者の死生観に関する過去10年間の文献検討 死の準備教育確立に向けての試み. 名寄市立大学紀要, 3, 49-58, 2009.
- 6) デーケンA：死への準備教育の意義. デーケンA, メジカルフレンド社編集部編集, 死を教える, 第1版, メジカルフレンド社, 東京, 13, 1992.
- 7) 大谷尚：SCAT：Steps for Coding and Theorization-明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法-. 感性工学, 10(3), 155-160, 2008.
- 8) 山本俊一：老年期の教育. デーケンA, メジカルフレンド社編集部編集, 死を教える, 第1版, メジカルフレンド社, 東京, 1992.
- 9) 重兼芳子：生と死をみつめる. 樋口和彦, 平山正実編, 生と死の教育, 第1版, 創元社, 大阪, 9, 1986.
- 10) サンダースCM：死別の悲しみを癒すアドバイスブック. 白根美穂子訳, 初版, 筑摩書房, 東京, 2009.
- 11) 木内千晶, 吉田千鶴子：高齢者の希望する終末期の迎え方. 岩手県立大学看護学部紀要, 6, 77-82, 2004.
- 12) 波平恵美子：病と死の文化. 朝日新聞社, 東京, 7, 1990.
- 13) 竹中星郎, 星薫：老年期の心理と病理. 放送大学教材, 東京, 49, 2004.
- 14) 近藤裕：「自分の死」を死ぬと言うこと. デーケンA, メジカルフレンド社編集部編集, 死を看取る, 第1版, メジカルフレンド社, 東京, 167, 1997.
- 15) デーケンA：悲嘆のプロセス. デーケンA, メジカルフレンド社編集部編集, 死を看取る, 第1版, メジカルフレンド社, 東京, 256, 1997.

(平成24年12月3日受理)

Research on the Consciousness of and Preparation for Death among Elderly Couples

Mayumi FUKUTAKE, Hatsue OKADA and Yoshiko FUTOUYU

(Accepted Dec. 3, 2012)

Key words : elderly couple, preparation of death, consciousness of death

Abstract

This research clarified the consciousness of and preparation for death among 10 elderly couples over 70 who live at home. Semi-structured interviews questioned them about their own and their spouse's death and what preparations they have made for death. Analysis was made under SCAT, a qualitative analytical method, to set up core categories. As a result, with an average age of 77.9, the subjects' consciousness of death was divided into three core categories: "thinking about one's own way of life," "postponing thinking about death," and "a sense of reality of death as a couple." This made it possible to summarize the consciousness of preparation for death under 3 categories: "confused about making preparations," "preparation for death devised together by the couple," and "unable to predict the death of one's spouse or preparations for death."

Correspondence to : Mayumi FUKUTAKE

Department of Nursing,

Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki, 701-0194, Japan

E-Mail : fukutake.m@jc.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.22, No.2, 2013 174 – 184)